海外通信

雨谷昭弘

住谷先生

春も近いこの頃、先生にはお元気にお過ごしのことと存じます。

マンチェスターへ参りまして、はや半年、こちらの生活にもすっかり慣れ、元気に過ごしております。ここ、Univ. of Manchester Institute of Science and Technology（略称 UMIST ユミスト）は、ロンドンの Imperial College of Science and Technology と並んで工科系としては英国最高の大学です。御存知のように、文科系ではオックスフォード、ケンブリッジです。英国でも日本と同様に大学格差があり、各大学の評価が就職その他すべての面に影響を与えております。大学入試の制度がない英国でもこのような大学の格差があることには多少驚いておりますが、米国でも MIT, Univ. of California 等がエリートコースとして評価されていることを考えれば、この種の問題は世界各国共通のように思えます。

ここ UMIST で特に目につく点、日本と異なっている点は、海外からの留学生および研究スタッフが圧倒的に多いことです。これは Imperial College でも同じです。留学生の大半は旧英領植民地（Common Wealth）および中近東から来ております。この点で大英帝国の面影を見い出すとともに、衰えたりとはいえ、英国の全世界に対する潜在力を感じざるを得ません。これら留学生のほとんどが帰国後はその国の指導者になっているのですから。この点、わが国の大学の底の浅さと弱さを痛感しております。また、教員および研究員も半数が海外から来ており、たとえば現在の電気工学部の Head は南アフリカ、電力工学科の Head はスペインという有様です。

また教授の数が非常に少ない点も日本と大変異なっております。たとえば、電気工学部で講師以上の教員30名に対し、教授は４名です。従って、教員相互の業績に関する競争が非常に激しく、大半は教授になれません。この点、私にとって非常に刺激となっております。

ところで、先日 “History Today” なる月刊誌の pp. 103～110 に、彼のローザルクセンブルグの記事を見つけました。さっそく買い求め、昨日 Air Mail にてそちらへお送りいたしました。お役に立てば幸いに存じます。では、本日はこれにて失礼いたします。奥様にもよろしくお伝え下さい。御自愛のほどお祈りいたします。　３月１日　　雨谷　昭弘

＊雨谷昭弘氏（大学工学部専任講師・電磁気学）は、現在、英国、マンチェスター大学科学技術研究所において、超高圧送電系統における開閉サージの解折を研究中である。帰国は本年８月の予定。

憲政記念館特別展への出展にあたって

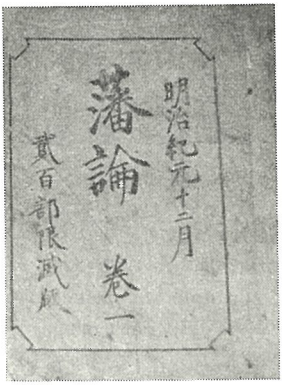
中條毅

わが国の議会開設八十年を記念して「憲政記念館」が国会議事堂の前に設立された。議会制民主主義に対する認識を深めるために、国会の組織や運営などを紹介する内外の資料と議会政治の発展に貢献した人々に関係のある資料とを展示して、広く一般に公開している。

この憲政記念館の開館記念特別展において、同志社大学人文科学研究所蔵『藩論』が、そのトップに展示され、初公開された。『藩論』の原本は木版刷、明治紀元十二月に二百部印刷されたが、現在は同志社大人文研に唯一冊、保存されている門外不出の貴重な書物である。戦後、住谷悦治総長らと明治文化の研究をしていた絲屋寿雄氏（近代映画協会役員）から人文研が譲り受けたものである。

『藩論』は土佐藩士、坂本龍馬の憲政意見と称されているもので、民主主義思想の立場から世論による政治を提唱して、藩政の改革を論じたものであり、「五箇条の御誓文」の先駆となった「船中八策」（慶応三年六月、坂本龍馬が長崎から京への航海途上まとめた八項目から成る構想）の背景となったものである。

（大学人文科学研究所長）



『藩　論』について

『藩論』について

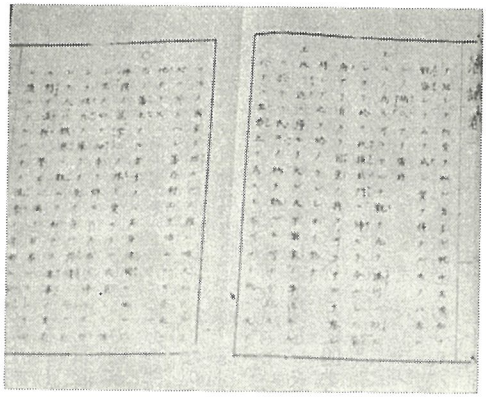
杉井六郎

キリスト教社会問題研究会はその発足当初、当時、代表であった住谷悦治博士の世話で、絲屋寿雄氏の襲蔵にかかる明治初期の政治・経済関係の稀覯書をまとめて、西北書店を介して購入した。研究会では、この文献の特殊性にかんがみ、「絲屋文庫」となづけて、

従来これを別置形式をとって保管している。『藩論』はそのなかの白眉の一冊である。

いま、『藩論』の明治憲政史、あるいは日本における近代政治史上の位置について、諸先学の驥尾に付してこれを考究することは、別の機会に譲るとして、『藩論』研究に関する私の研究上の一つの迂路をのべて、読者諸賢の参考に供しようと思う。

すでに周知のように、この『藩論』は、昭和四十四年五月に同志社大学住谷篠部奨学金



『藩論』の原本

出版会によって原版本の体裁そのままに複製され、これには住谷総長による解説が末尾に合綴されている。これによると、『藩論』は明治四十四（一九一一）年七月の「ジャパン・クロニクル」にイギリス人ホールという人の翻訳が掲載されているとある。

住谷総長のこの解説は、尾佐竹猛博士の「坂本龍馬の『藩論』」（明治文化研究会編「季刊明治文化研究」第一輯所収、昭和九年二月、書物展望社）、さらには、千頭清臣の『坂本龍馬』（「偉人伝叢書」第二冊、大正三年六月、博文館）によっていると思われる。すなわち、前者は明治四十四年七月二十一日の「ジャパン・クロニクル」に英訳されて掲載されたとし、後者は、じつは前者が典拠としたものであるが、「著者曾て之れを「ジャパン・クロニクル」紙上（明治四十四年七月二十一日発行）に掲げたる事あり」とあって、二四八ページから二六三ページにわたって Translation of a Japanese pamphlet, entitled "Han Ron" ("The Clan Discussion.") Part I, Part II. を引用紹介している。千頭のこの文章は、その「著者」というのは誰であるか明瞭でないところがあるが、恐らくは千頭個人とみるのが穏当であろう。そうすると、ここに一つ不思議な事実にぶつかる。すなわち、諸書ひとしく伝えている「ジャパン・クロニクル」の明治四十四年七月二十一日の紙面をみると、『藩論』に関する記事はなに一つ見当たらない。念のために、その前後を渉猟しても、さらに「ジャパン・クロニクル・ウィークリー・エディション」を見ても該当する記事はまったくない。掲載主が指摘する紙上ならびにその日付に該当記事が見られないことは、これをどのように解すべきか。それのみならず、当日付の「ジャパン・クロニクル」にたよって従来これを確認することがどうしてなされなかったのであろうか、という疑問を禁じえない。

従来、『藩論』はその原版本が湮滅し、この英訳文が伝えられたこと、高橋信司博士の研究は、筆者はまだ閲読する機をえないが、住谷総長の話によると、英訳文からの反訳を試みられているというから、千頭清臣の『坂本龍馬』に収められた英訳「藩論」が基礎になったことが考えられる——しかもその英訳「藩論」は冒頭の「小引（しょういん）」を欠き、一章「一

新の総論」、二章「甫めて変革の基を開く」だけが逐語的に訳されたものである――が、筆者の追究の関心は、したがって千頭清臣の『坂本龍馬』所収の英訳「藩論」の藍本は何であるかというにあるかというにあった。

この探求は短時日になしえないとなかば諦めていたところ、最近、憲政記念館、滝口紀男館長からつぎのようなご教示にあずかった。館長の早速のご好意を記して感謝し、あわせて、英訳「藩論」の藍本と、これに関する西田長寿博士の解説を披露しておこう。

「ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイル」（東大明治文庫所蔵）の一八六九年十二月三十日（明治二年十一月二十八日）紙上には、

HAN RON

We are glad to be able to give our readers the first part of another interesting Japanese political pamphlet. When completed, we shall comment upon it in our leading columns. と表題および注記がなされて、Translation of a Japanese Pamphlet, entitled 'Han Ron', (The Clans. A Discussion.) の題名が続き、第一章が掲載され、末尾に The second part in our next と、次号に続載のむねをしるしている。この訳者については記載がなく、また明治文庫には一八七〇年以降の「ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイル」は欠けているので、西田博士は「一八七〇年一月以降の同紙に接し得ば、全部が知得されようし、その論評をも知らることと思ふ。此の訳者が何人であるか等の詮議は私のなし得る所でない。唯だ以上の事実が或は大方の研究家に少しでも役立てばよい」（「『藩論』の英訳」（『明治文化』七巻六号・昭和九年六月所収））としるされている。いま早急に「ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイル」の「藩論」に関するコメントを知ることができないのは残念であるが、『藩論』がその版本の出版から二年たらずでその翻訳が維新草創期の政治論として海外外国人にも報ぜられた意味は、きわめて注目すべきことである。いま、千頭清臣の『坂本龍馬』所収英訳文と比較すると、わずかの異同があるが、ほとんど同一の文と見なしてよく、しかも、その題名が「ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイル」が、The Clans. A Discussion としているのは、「小引（しょういん）」にみられる原義に忠実であると思われる。すなわち、「当世時論ノ一歩ヲ告論シ竊ニ藩議ヲ右（タス）ケンカ為ノ聯筆写ノ労ニ代ル老婆心切ナリ」とは、それである。

これによって『藩論』の英訳が出されたのは、明治四十四年七月「ジャパン・クロニクル」ではなくて、「ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイル」によって、明治二年十一月末からであり、その訳者はホールと断定することはできないが、版籍奉還後の政体の帰趨をひろく内外、江湖に知らせたことは事実である。なお、前述のような訛伝には、なんらかの理由があると思われ、恐らくは「ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイル」から、さらに後年いずれかに転載することが行なわれたのであろう。とまれ、草創期の政治過程に、内外からする干渉のなかで、土佐藩の自生の「藩論」が、日本の政体の行くえとして大きな役割を果たしていたと思われることは、看過できない痛快事と称してよい。

なお、この小文をおわるに当たって、かさねて衆議院憲政記念館館長、滝口紀男氏のご厚誼に深い感謝をささげます。

（大学人文科学研究所専任研究員）